熊本大学学術リポジトリ

断乳時期に関する検討

著者	水上 明子, 山中 千春, 港 夏希
雑誌名	熊本大学教育学部紀要 自然科学
巻	44
ページ	145-152
発行年	1995-12-15
その他の言語のタイトル	A Study of the Timing of Weaning
URL	http://hdl.handle.net/2298/2305

熊本大学教育学部紀要，自然科学
第44号，145－152，1995

断乳時期に関する検討

水上明子・山中千春*・港　夏希**

A Study of the Timing of Weaning

Akiko MINAKAMI, Chiharu YAMANAKA, and Natsuki MINATO

(Received September 4, 1995)

An interview was carried out with 135 mothers of 18 months old infants, living in Kumamoto City, to investigate the timing of weaning. The following results were obtained:
1. The age when infants were weaned was 7 months or younger in 28.2% of all infants, 7-11 months in 37%, and after 12 months in 34.8%. The timing of weaning was closely related to the milk secreting activity and maternal self-consciousness about breast-feeding.
2. Weaning often did not go smoothly when it was attempted after 12 months of age.
3. Substitution of baby food for milk went smoothly in most cases, irrespective of the timing of weaning. In cases where weaning was attempted after 12 months of age, establishment of a 3 meals a day habit was slightly delayed, and the amount of food taken at age 18 months was slightly reduced.

Key words: timing of weaning, baby food, months after birth

I 緒　　言

母乳栄養は，乳児にとって最高の栄養である．わが国では，1975年頃より母乳育児の推進のとりくみが行われ，生後6週まではぜひ母乳で，出来れば3か月まで継続[1]という母乳哺育が浸透してきている．しかし，離乳が進行し，乳児が乳汁以外の食物の摂取が容易になると，いつ母乳をやめるかという断乳の時期が問題になる．

二木は[2]，「断乳とは，本邦では母乳を完全に止めるときに用いられているが，欧米ではこれが曖昧で，たとえばWeaningは離乳という意味にも断乳という意味にも使われいるようで，また，人工栄養でビン哺乳からコップのみへの移行にも使われている」と述べている．さらに，断乳ということは，「乳をやめること」と「乳房からの吸啜を止めること」のふたつの意味があるが，「乳房からの哺乳を中止する」ことに意味があると述べている．

ところで，離乳のすすめかたは，「離乳の基本」[3]に示されているが，断乳にははっきりした基準がなく，断乳の時期については，離乳の完了と一致すべきであるという説と，そうではないという説がある．前者は，断乳が遅れると，口機能の成熟の抑制，虫歯の発生[4]，咀嚼の発達阻害の可能性や母乳に執着しすぎるための栄養上，心理上の欠点が生じる[5]といい，後者は，母乳哺育

*　大阪医科大学付属病院
**　宮崎県立病院

は，母と子の絆を強めるから，母子双方が不要になるまで母乳を続けるべきである[6]という．いづれにせよ断乳は離乳の進行と密接な関係がある．

そこで，本研究は，育児中の母親の断乳（母乳中止）時期に関する実態を調査し，特に離乳の進行状態との関連を検討した．

II　研究方法

1）調査期間　平成6年10月6日から同年11月15日まで．

2）対象

熊本市の保健所及び保健センターが実施している1歳6か月児健康診査の対象児の母親のうち，断乳前の栄養が人工栄養であった者を除く135名を対象にした．対象者の背景は，表1に示すとおりであった．

表1　対象者の背景　　(%)

年齢(歳)	20代(43.2)	30代(55.6)	40代(0.7)	
家族形態	核家族 (89.6)	複合家族(10.4)		
職　業	あり　(22.2)	なし　(77.8)		
出生順位	第1子　(45.1)	第2子以上(44.9)		
離乳前栄養	母乳　(43.0)	混合　(57.0)		

n＝135

3）方法

健診時に質問紙による面接調査を行った．

なお，断乳時期と離乳の進行状態の関連の検討は，諸説を参考に，断乳時期を7か月未満，7～11か月，12か月以降の3群に分類し，3群間の離乳の進行状態を比較した．離乳の進行状態は「離乳の基本」[3]の基準を参照した．

統計的有意差検定は，χ^2検定を行い5%水準以下を有意差があるとした．

III　結　　果

1　断乳の実態

1）断乳時期

(1) 断乳時期の認識

「一般的にいつ断乳したらよいと思うか」については，「7か月～1年」が93人（68.9%）で最も多く，次いで「決めなくてもよい」27人（20%），「1年以上」8人（5.9%），「6か月まで」7人（5.2%）であった．

(2) 断乳実施時期

実際に断乳を実施した時期は（図1），早い者は5か月未満から遅い者は12か月以降の幅があった．7か月未満は38人（28.2%），7～11か月は50人（37%），12か月以降は47人（34.8%）であった．また，調査時点で断乳が完了してない者が13人（9.6%）あった．この13人の平均授乳回数は1.9±1.2

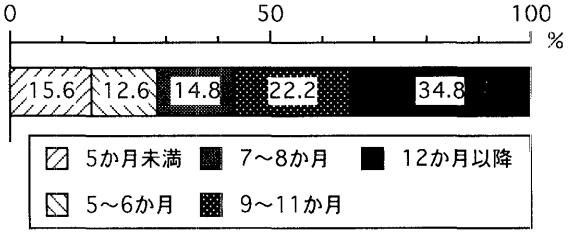

図1　断乳実施時期

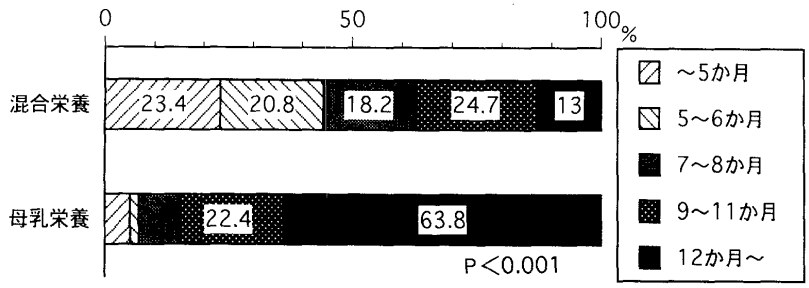

図 2　断乳前栄養別断乳時期

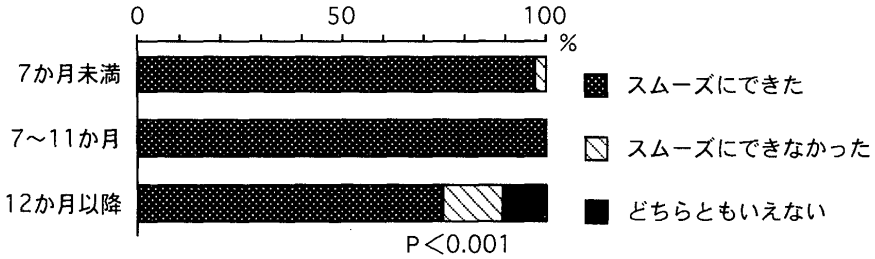

図 3　断乳時期別断乳状況

回で，決まっていない者が 1 人みられた．授乳理由は「欲しがるから」が多かった．

2）対象者の背景と断乳時期

対象者の背景と断乳時期の関連については，年齢，家族形態，職業，出生順位別の断乳時期はいづれも有意の差はなかった．しかし，断乳前の栄養別の断乳時期は有意に（P＜0.001）異なり（図 2），混合栄養は断乳が早く，5 か月未満は 23.4%，5～6 か月は 20.8%，あわせて 6 か月までに 44.2%が断乳していた．しかし，12 か月以降の遅い者も 13%いた．一方，母乳栄養は断乳が遅く，5 か月未満と 5～6 か月あわせ 6 か月までの断乳は 6.9%で少なく，12 か月以降が 63.8%と 6 割以上を占めていた．

3）断乳のきっかけ

断乳のきっかけになった主な事柄は，「母乳が出なくなった」52 人が最も多く，次いで「母乳を欲しがらなくなった」と「自分の判断」が 27 人，「病院，保健所でいわれた」16 人，「周囲の人にいわれた」10 人等であった．

4）断乳状況

断乳状況については，約 9 割がスムーズに断乳できていた．しかし，断乳時期別の断乳状況は（図 3），7～11 か月群は全員，7 か月未満群は 97.3%がスムーズに断乳できているのに対し，12 か月以降群はスムーズに断乳できた者は 74.5%で少なく，3 群の断乳状況は有意差がみられた（P＜0.001）．

2　断乳時期と離乳の進行状態

1）断乳時期と離乳の開始

断乳時期別の離乳開始時期は（図 4），12 か月以降群は，5 か月未満の離乳開始は 19.1%で，7 か月～11 か月群の 36%，7 か月未満群の 36.8%に比べて少なかった．しかし，6 か月までには 7 か月未満群は 84.2%，7～11 か月群は 92%，12 か月以降群は 89.3%の者が開始しており，3 群間

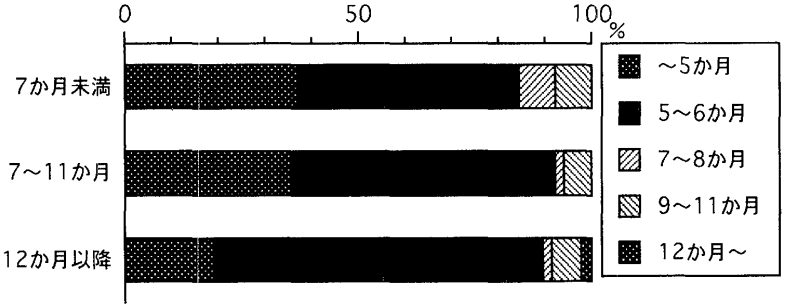

図4 断乳時期別離乳開始

の離乳開始には有意差はみられなかった.

2) 断乳時期と離乳完了時期

断乳時期別の離乳完了を示す3回食移行状況は(図5), 12か月時点の移行は, 7か月未満群は全員, 7～11か月群は96%, 12か月以降群は91%であり, 12か月までにほとんどの者が3回食になっていた. しかし, 12か月以降群は, 10か月時点の3回食移行は30.4%, 11か月時点では41.3%で, 7か月未満群, 7～11か月群の2群と比べ著しく低率であった.

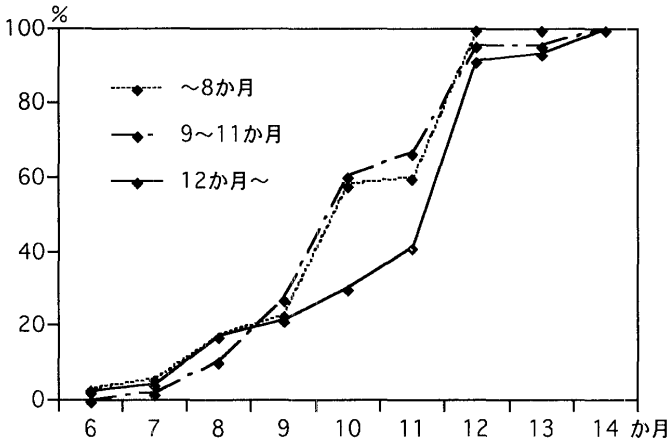

図5 断乳時期別3回食移行の累積相対度数

3) 断乳時期と1歳6か月児の食生活

離乳が完了した1歳6か月児の食生活については, 「牛乳・粉乳量」と「食事量」を聴取した.

(1) 牛乳・粉乳量

断乳時期別の1歳6か月児の1日の牛乳・粉乳量(表2)は, 12か月以降群は287±154mlであり, 7か月未満群, 7～11か月群の2群に比べやや少なかったが, 3群間の摂取量には統計的有意差はみられなかった.

表2 1歳6か月児の牛乳・粉乳量

ml

断乳時期	平均	標準偏差
7か月未満	378	277
7－11か月	358	189
12か月以降	287	154

(2) 食事量

断乳時期別の食事量(図6)は, 「よく食べる」は, 7か月未満群54.1%, 7～11か月群66%, 12か月以降群70.2%であり, 7か月未満群に「ムラがある」がやや多く, 12か月以降群に「あまり食べない」がやや多い傾向がみられた.

4) 1歳6カ月児の食行動

1歳6か月児の食行動については, 「咀嚼状態」, 「食べ方」, 「スプーンの使用状況」を聴取した.

(1) 咀嚼状態

断乳時期別の咀嚼状態は(図7), 7～11か月群は, 「歯茎でつぶして食べる」が57.1%で「大

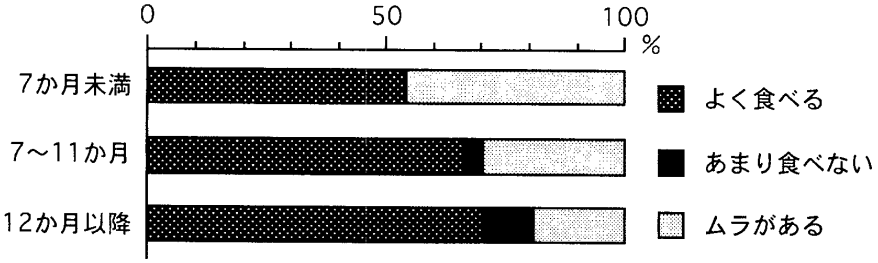

図6　断乳時期別1歳6か月児の食生活

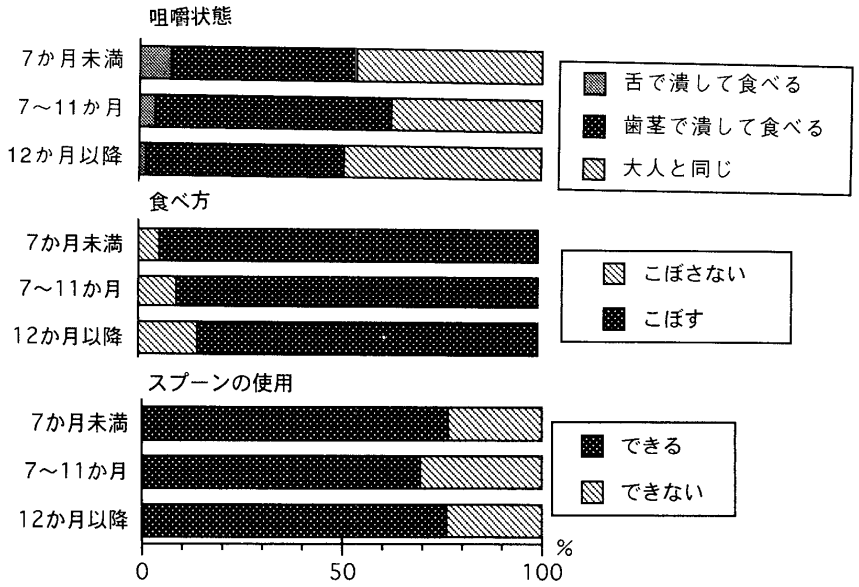

図7　断乳時期別1歳6か月児の食行動

人と同じ」38.8%より多く，7か月未満群と12か月以降群の2群は，「歯茎でつぶして食べる」と「大人と同じ」はほぼ同率であったが，3群間の咀嚼状態に有意差はなかった．

(2) 食べ方

断乳時期別の食べ方は（図7），3群ともに「こぼさずに食べる」者は少数で，ほとんどの者がこぼしており，3群間の差はなかった．

(3) スプーンの使用状況

断乳時期別のスプーンの使用状況は（図7），3群共に「できる」者が7割以上と多く，3群間に有意差はなかった．

IV　考　　察

1　断乳の実態

断乳の具体的時期については，10か月まで[7]，10か月前後[8]，8～9か月頃より開始しおそくとも1年まで[9]，歩行開始後[6)10]，歩行開始後2歳まで[11]という諸記述がある．また，断乳時期の指導については，水野らの全国の保健所調査によると，1982年[12]は，60%前後は子供の状態や親の希望

を加味しているが，一律に指導している所は7～12か月である．その後，1990年[13]では，親子の様子により決めているところが74%でその月齢は10～12か月を目安に指導している．本調査では，断乳時期の認識については，「7か月から1年がよい」が約7割を占め，次に「決めなくてもよい」が2割であった．この結果は，高野ら[14]の1987年の東京都区部と富山県内保健所調査で6か月までの授乳継続希望が51.5%と53%と比較すると著しく遅いが，上記の断乳時期の諸記述や断乳指導を反映していると考えられる．

一方，現実の断乳時期をみると，認識よりも早い7か月未満に28.2%が断乳し，12か月以降は34.8%であった．現実の断乳は，認識と一致している者とそうでない者とがいたが，三井ら[15]の1983年報告の7か月末50%，11か月末80%より遅かった．このように断乳時期の認識，現実ともに従来の報告より遅いのは，この10年来，母乳哺育は栄養学的，免疫学的利点だけではなく，母子相互作用のスタートとしての意義が大きい[16]といわれていることが広く浸透し，母親達は，できるだけ母乳を与えたいと考えているのではないかと推察される．

そこで，対象者の背景と現実の断乳時期との関係をみてみると，年齢，職業，家族形態，児の出生順位別の断乳時期はいづれも有意の差がなく，断乳前の栄養法だけに違いがみられた．即ち，混合栄養は，5か月未満，5～6か月の早い時期の断乳が多く，母乳栄養では，5か月未満，5～6か月までの断乳は僅少で，12か月以降の遅い者が63.8%あった．北ら[17]も母乳哺育のみの断乳は著しく遅いと報告しているが，母乳栄養では，乳汁分泌が良好のため，児に授乳上のトラブルがなく，母親も授乳により乳房緊満等の苦痛が回避できるので，おのずと断乳は遅くなるのであろう．また，母乳分泌の良否にかかわらず，母乳哺育は母子の絆を強めるという意識が強ければ，断乳時期はおそくなるであろう．従って，断乳時期は，母乳分泌の良否と母親の母乳哺育に対する意識と密接な関係があるといえよう．これは，断乳のきっかけは，母乳がでなくなったが最も多く，次いで，児が欲しがらなくなった，自分の判断であったことからも推測できる．離乳が進行し授乳回数が減じると母乳分泌も減じ，児の方も母乳よりも離乳食を好むようになる．母親は母乳の止め時期と判断し，断乳すると思われるが，母乳分泌が良ければ，あるいは母乳分泌の良否にかかわらず，母乳哺育の希望が強ければ断乳は先送りにされ，断乳は遅くなると思われる．

断乳状況については，本調査は，すでに断乳が完了している時点の聴取であり，しかも，11か月までに65%が断乳しているためか，ほとんどの者が「スムーズに断乳できた」と回答していたが，断乳時期別にみてみると，7～11か月の断乳の者は全員がスムーズであったのに対し，12か月以降はスムーズでなかった者が有意に多かった．経験的に10か月前後が断乳しやすい，1年以上では児に甘えや自我が強くなる[18]といわれているが，これを裏付ける結果であった．しかし，今村[19]は，離乳が完了しても精神が安定して安眠できるため，眠るときに母乳を吸う乳児は珍しくはないが，母親がやめる気であれば，多くは1歳3～6か月頃やめると述べている．二木[20]も咀嚼機能が順調に発達し，その他の点でも問題がないならば，幼児期以降も就眠儀式のように夜眠る時のみ母乳をしゃぶりのむ程度は問題ないと述べている．前述の北ら[17]も，1年以後に断乳しても，1か月以内に母児ともに適応できていると報告している．本調査でも，断乳がまだで就眠時だけ授乳している者があった．詳細な聴取はしていないが，1年以上になると断乳が困難になるが，断乳指導においては，児の発育上の問題や母親の心理等母児双方の状況を十分把握して，問題がなければ急に母乳を途絶することはないと考えられる．

2 断乳時期と離乳の進行状態

離乳の開始時期は，「離乳の基本」[3]によると，5か月になった頃が適当で，発育のよい者は4か

月から開始できるが，7か月以降にならないことが望ましいとされている．本調査では，6か月までに9割以上の者が離乳開始しており断乳時期別の差はなかった．離乳開始は，断乳の時期とは全く関係なく「離乳の基本」を目安に実施されているといえよう．

離乳の完了時期は，「離乳の基本」[3]によると，通常満1歳頃まで，必要栄養量の3分の2以上が乳汁以外の固形食からとれるようになる状態で食事は1日3回と間食となる時点とされている．この離乳完了の目安とされる3回食の移行状況は，ほとんどの者が12か月までに移行していたが，10,11か月時点では，断乳が12カ月以降の者の移行は少なかった．12か月以降の断乳は，断乳前母乳栄養であった者が多く，母乳哺育のため，おのずと3回食への移行が遅れるものの，離乳の基本に沿った12か月までには，離乳を完了させていると考えられる．

離乳が完了した1歳6か月の食生活に関しては，「離乳の基本」[3]では，1年前後の牛乳量は，1日400mlと示されている．本調査の牛乳，粉乳の平均量は，この目安に沿った量があたえられていたが，個々の児の量につては大きな幅があった．また，断乳時期別の平均量は有意差はなかったが，12か月以降の断乳の児の量はやや少なく，今後の検討が必要であろう．

食事量については，断乳が早い7か月未満の者は，ムラがある者がやや多く，12か月以降の者はあまり食べないがやや多い傾向がみられた．7か月未満の断乳は混合栄養の者が多く，哺乳欲と哺乳量のバランスが崩れる哺乳瓶[20]で，ミルクを飲んだ期間が長かったことの影響が考えられる．また，12か月以降の断乳については，児の精神的安定のため授乳している者と，そうでない者がいると思われるが，そうでない者に母乳への執着が強く，あまり食べない児がいるのではないかと考えられる．しかし，食事量は母親の主観的評価であり，個人差も大きいことから，今後さらに検討を加えるべきであろう．

1歳6か月児の食行動に関しては，児の咀嚼力，食べ方，スプーンの使用状況いづれも年齢に応じた状況[21]で，断乳時期による違いは全くなかった．離乳の目的は，咀嚼能力の発達を促すことにあり，咀嚼の発達は，「口唇食べ」→「舌食べ」→「歯ぐき食」→「歯食べ」の順に行われ離乳の進み方と密接な相関がある．また，咀嚼力は，先天的反射能力ではなく，練習により獲得される[22]といわれる．従って，いつ断乳を行ったかというよりも，どのように離乳食を調理し与えるか等の離乳食の進め方が重要であると考えられる．また，食べ方，スプーンの使用についても，母親のしつけや養育態度の影響が大きく，断乳時期の影響は少ないと考えられる．

V 結　　論

熊本市内に在住する，1歳6か月児の母親135人を対象に，断乳の時期に関する実態について面接調査を行い検討した結果，以下のことが判明した．

1. 断乳時期については，7〜12か月がよいと認識している者が多いが，実際の断乳時期は，5か月未満から12か月以降に及ぶ幅があり，いづれも従来の報告より遅かった．
2. 断乳時期は，混合栄養は早く，母乳栄養は遅く12か月以降が6割以上を占め，母乳分泌や母乳哺育に対する意識と密接な関連がみられた．
3. 12か月以降の断乳は，断乳が困難な者が多かった．
4. 離乳開始は，ほとんどの者が6か月までに開始しており，断乳時期とは関係がなかった．
5. 3回食への移行は，ほとんどの者が12か月までに移行していたが，12か月以降の断乳は，10,11か月時点の移行は少なかった．

6. 1歳6か月児の食生活については，平均牛乳・粉乳量，食事量は，断乳時期の違いによる有意差はなかったが，今後検討を要する．
7. 1歳6か月時点の食行動については，咀嚼状態，食べ方，スプーンの使用状況等，いづれも断乳時期の違いによる有意差はなかった．

終わりに調査にご協力いただきました皆様に心から感謝いたします．

引用文献

1) 厚生統計協会：厚生の指標，22 (9)，141 (1975)．
2) 二木　武：断乳,周産期医学，14 (4)，46 (1984)．
3) 今村栄一編著：離乳の基本，1981，医歯薬出版．
4) 大竹邦明：断乳ー歯科学的立場よりみて，周産期医学，14 (4)，41-45 (1984)．
5) 二木　武：断乳，周産期医学，14 (4)，46-47 (1984)．
6) 小林美智子：断乳ー桶谷式断乳療法，周産期医学，14(4)，550-551 (1984)．
7) 大竹邦明：断乳ー歯科学的立場よりみて，周産期医学，14(4)，44(1984)．
8) 平山宗宏：断乳－断乳を考えるー，周産期医学，14 (4)，560 (1984)．
9) 今村榮一他：現代こども百科，40 (1988)，中央法規出版株式会社．
10) 藤森和子・根津八紘：産褥乳房管理法，109，諏訪メジカルサービス．
11) 山西みな子：母乳育児と母性，看護 MOOK，21，138 (1986)，金原出版株式会社．
12) 水野清子他：日本各地保健所における離乳指導の実態，第II報離乳指導の現場からみた“離乳の基本”の検討，小児保健研究，43 (1)，55-56 (1984)．
13) 水野清子他：乳幼児の栄養・食生活に関する研究，日本総合愛育研究所紀要，26集，111-115 (1990)．
14) 高野　陽：母乳哺育からみた母性意識，日本総合愛育研究所紀要，23集，7-10 (1987)．
15) 三井政子他：乳児栄養に関する母親の判断と行動について，母性衛生，24 (1)，95-99 (1983)．
16) 竹内　徹：人乳の利点と問題点，周産期医学，22 (増刊)，293-297 (1992)．
17) 北　志保他：断乳 (Weaning) に関しての一考察，母性衛生，30 (2)，252-257 (1989)．
18) 平山宗宏：母乳のやめ方，周産期医学，22 (増刊)，319 (1992)．
19) 今村榮一：離乳期の乳汁の与え方，周産期医学，22 (増刊)，424 (1992)．
20) 二木　武：母乳栄養，周産期医学，20 (臨時増刊)，388-389 (1990)．
21) 二木武・帆足栄一・川井尚編著：小児の発達栄養行動，2 (1992)，医歯薬出版株式会社．
日本小児保健協会監修・母子衛生研究会企画編集：1歳6か月児健康診査の手引き，92-96(1987)，．母子保健事業団．
22) 二木　武：自立離乳とベビーフード，18-28(1985)，日本小児医事出版会．